

Views from Orienteering

村越 真



インターハイ登山種目。休憩時間に地図で現在地を確認している。この直後に位置を特定すべき読図ポイントが現れる。

事故は誰にでも起こりえる

昨年海上保安庁を退官し、プロトレイルランナーとして活躍中だった相馬剛さんが、マッターホルンの登攀中に滑落事故に遭った。相馬さんは7月中旬にアイガーを巡る100kmのトレイルレースに出たが、その後マッターホルンへの登攀を試み、事故に遭った。

40年近くオリエンテーリング活動をして、活動に関する場面で友人を亡くしたことはなかったのに、ここ2年で5人の友人を失うことになった。その中でも、この事故は最もショッキングな事故となった。それは、彼が、元々リスクマネジメントに関わる仕事をし、アウトドアでは避けられないリスクに対して一定の自制心を持った人物であったと感じさせていたことが大きい。

数年前、私がディレクターを務めたレースが台風の余波でコース短縮となった。前日から当日にかけて相当の雨量であったが、コースを短縮して実施することになった。相馬さんは出場してくれたが、レース後、「リスクマネジメントを仕事としている者として・・・」と断り書きの上で、そのレースをやるべきではなかった理由が理路整然と列挙してあった。そんなに冷静に自然のリスクを語れる人だったのに。どんなに注意深い人間でも、制御できない自然の中では事故は避けられない。その事実を、リスクをテーマに研究活動をしている私には既知のことではあったが、改めてその現実を身近な人間の事故によって突きつけられるのは辛いものがある。

遭難に関する情報を探しに、彼が主宰するFuji trailheadのウェブサイト

見に行ったら、「山で死んではいけない」と書いてあった。「そう思っているなら、ちゃんと帰ってこいよ！」思わず心の中で叫んでしまった。

思えば、「トレラン紀元前」を牽引した下島溪さんも、マッターホルンで滑落死している。単なる偶然だとしても、そこには、中途半端な難易度（ロープで確保しなくてもいけると思う程度の斜面）が、リスクを高めるという教訓をくみ取るべきだろう。相馬さんの場合には、100kmレースのわずかに数日後というのも気になる要因だ。どんなに強靱な肉体を持ってしても、100kmレースは身体のダメージを与えたことだろう。それも事故の遠因になっているかもしれない。こうやってリスク要因を書き出すごとに、それに彼が無自覚だったのか、それとも自覚しつつも挑戦した上での敗退なのか、ともはや答えの得

られない問いかけをしてしまう。

オリエンテーリングには大きな身体的リスクはない。しかし、ミスは競技にとって致命的である。そして、多くのミスは自然の曖昧さを読み誤ることによって発生する。その点では、オリエンテーリング競技者が遭遇するリスクはアウトドアにおける身体的リスク源となら変わることはない。かつて招いた世界チャンピオンのペテル・トールセンが、オリエンテーリングをしている時には、(リスクに対して)「頭の中でベルを鳴らせ」という言葉を残していった。また、その後の国際大会の運営の中で、イベントアドバイザーからはしばしば「事態はコントロールされているか？」という問いかけを受けた。それは自然に対峙する競技者／運営者としての長い歴史の中から生まれた言葉であろう。そうした教訓によって、オリエンテーリングが悲劇を避けているとすれば、それはアウトドアの世界に提供すべき重要な価値の一つである。

受け入れるべきリスク

7月3日、静岡県の消防学校での水難救助訓練中、訓練生二人があわや溺死という事故が起こった。3日間の水難救助訓練の最終日で、しかも3時間近くにわたる訓練の最終段階で5mの水深のプールでの着衣泳での立ち泳ぎが実施された。二人の疲労の中努力はしたが、沈んでしまい、意識を失ったという。二人はすぐに救助され、心肺蘇生法やAED(実際には利用せず)が試みられた。まもなく二人とも息を吹き返し、最悪の事態は免れた。もちろん、それは消防という日頃からリスク管理を行っている訓練されている組織だからできたことだろう。

学校教育の場でこのような事故が起こると、訓練内容が見直される。着衣泳、立ち泳ぎという厳しい訓練が問題だ、となる。しかし、ここで悩ましいのは、これが消防学校の訓練だということだ。彼らはここでの研修を終えれば、より厳しい現場に出る。職業の特性上、そこでは命をも危険にさらすリスクがある。それはむしろどんな訓練よりも高リスクだろう。訓練を安全にすることはできるが、それでは意味をなさない。何より訓練生自体の将来の命を危険にさらすことになってしまう。

これは解決困難なジレンマだが、改めて考えてみれば、このようなジレンマは何も消防学校だけのものではない。

通常の学校教育でも、危ないものを全て排除することは可能だ。だが、それは将来どこかで出合うハザードに対する振る舞い方を習得する機会を奪い、リスクを先送りしているだけに過ぎないのかもしれない。先のリスクはそれほど目立たないから、どうしても、今のリスクをどうするか、という話になってしまう。

数十年先のリスクの責任を問われることはないだろうが、今のリスクが招いた結果の責任は、容易に取らされる。これも、リスクを先送りしがちな大きな理由となる。消防学校での訓練という特殊な状況が、教育とリスクを抱えるこの問題をあぶり出してくれたと言える。

もちろん、訓練と実践とは違う。訓練の場では表面的には同じように危険な内容でも、それは予め了解した上で設定することができる。このため、最悪の事態にならないようにダメージコントロールができる。そう考えれば、いたずらに訓練の質を下げ見かけ上の安全を確保するのではなく、コントロールした上で、そのリスクに立ち向かうべきなのだろう。

同じことはアウトドアのリスクにも言えるかもしれない。リスクにはそれを乗り越えることで得られる達成感というポジティブな側面がある。またそのリスクを乗り越えるための知恵は、日常生活にも示唆を与えてくれる。だとすれば、リスクを短絡的に排除するのではなく、意義あるリスクを自覚しつつ、そのリスクをコントロールする姿勢が要求される。リスクとそのコントロールという視点から見ると、オリエンテーリングの新しい価値が見えてくるのではないだろうか。

インターハイ登山

スポーツ種目として成立するのかという疑問のある登山競技だが、国体ではクライミングのみに、インターハイでは総合的な縦走競技として現在も続いている。

2年前、筑波のオリエンテーリング愛好会のOBの方が競技部長になったのを機会に見学に行ったが、今年も隣県の神奈川で実施されるということで、知り合いの高体連の幹部に頼んで見学させてもらった。

各県1校が代表として参加するので、男女とも200人近い高校生が箱根に集った。台風が接近する中での実施だったが、幸い私が見学した8月9日は終日曇りで小雨も降ったものの、大きく

崩れることはなかった。この日、男子は箱根の中央火口丘を中心とした約10kmのコースでの競技に挑んだ。

インターハイでは、登山中のマナーや歩行技術などがチェックされる他、読図問題も出される。配点は100点満点4点だが、配点の高い体力も、4人全員が歩き通せばほぼ満点に近いので、分散の大きさを考えると読図の配点は4%よりは遙かに大きいと思われる。

競技後、役員の方とおしゃべりして知ったのは、彼らは読図の比重をもっと上げたいと思っているということだった。それはそうだろう。読図は登山の重要な基礎スキルであるのだから。

一方で、読図を主体としたかつての踏査競技が、徹底した下見によって攻略されるというオリエンテーリングからは考えられないような競技状況であり、それを理由に種目から外れてしまったことがトラウマになっていることも、何度も語られた。彼らは私たちが思っているよりも、私たちに近いところにいるのかもしれない。

高校の登山競技がインターハイの他の種目のようなスポーツか、ということとは言い切れないというのは彼ら自身も思っていることのようにだ。だが、変動の多い自然の中でどう安全に振る舞うかという点は、競技でも重要な要素となっている。それは、山ガール・ボーイ、未組織登山者の増えた現状でも残すべき価値であるというのも、同時に彼らの認識のようだ。

だとしたら、彼らにオリエンテーリング界が蓄積したナビゲーションスキルを提供するというのは、単にオリエンテーリング普及という下心以上の意味があることではないかな、と思う。そう思って、知人が昨年からの監督をし、インターハイチャンピオンになった富士宮西高に、優勝のご褒美にマイクロレーサーを贈ることにした。

(注:このご褒美は、私が主催しているNPO法人Mnopに加えて、富士宮のアウトドアショップATC、コンパスショップドット・コンパスの協力によって実現しました)。

(村越 真)